国鉄の闘いに学び 平和協定の破棄へ

主張

三池闘争が収拾して以来、十二年間の経過をふりかえってみるとき、就労後のたたかいは、炭鉱産業をスクラップ・アンド・ビルドという独占の合理化をまともにうけながら、まさに去るも地獄・残るも地獄―という、不当・不法きわまる非情な弾圧のもとで、労働者の権利を守り、たかめるためのたたかいであった。

第三次合理化反対と三川鉱爆発事故の責任追及のたたかい、つづいて三川鉱坑内火災、宮浦鉱自然発火に対するたたかい、宮浦鉱移行反対のたたかいなどについて、三池労組と主婦会はひとつになり人間として生きることさえ認めようとしない資本主義的合理化の本性をムキ出しにしてくる三井資本に対して、CO闘争として、いくたの困難な条件を克服しながらたたかいをすすめてきた。

このことは、ただ三池労働者のみの課題であるということではなかった。

アメリカを中心とした世界の資本主義体制が、ベトナムをはじめとするインドシナをめぐる民族独立の戦いにおいて敗退する一方、自国の労働者階級の生活と権利を守る鋭い抵抗によって、国際間における対立を深めながら停滞、腐敗の一途をたどっていることであり、社会主義革命の平和的移行を裏づけさせるものといわねばならない。

自民党政府は、さきに安保体制のもとで国民と労働者の犠牲のうえにたって、高度成長政策を行なってきたものの、不況的要因を根本的には解決できないのみか、円切り上げ、中国の国連加入などにみる政治、経済の激動のなかで佐藤内閣は瓦解し、田中政権に移ったとはいえ、〝日本列島改造論〟など、企業より生活優先ということを唱えているが、むしろ七〇年代合理化は、労働力再編成時代ともいわれるように、情報管理（コンピューター）が一層拡大、強化されることによって人べらし自動化がすすみ、不況の犠牲を物価値上げと首切り、賃下げによって切りぬけようとするだろうということは明らかである。

われわれの闘いは今次春闘のなかにおける共闘委員会に結集した八五〇万人の労働者階級のストライキを背景とした闘いである。このことは、日経連の六％賃上げストップを打ち破り、一万円以上の賃上げを獲得したことにある。このことは、五月十五日沖縄返還協定批准国会を切り抜ける策であったし、大単産民間労組の実践的労働組合という右翼的統一戦線を総評内部に切り込ませようとするねらいがあったことを見のがしてはならないし、国鉄労働者の賃上げ闘争とともに、軍事輸送ストップの闘い、国鉄料金値上げ反対闘争という政治的課題まで吸収しながら、国民的闘いに発展させていったことは、六〇年代の階級的闘いが、三池の闘いであったとすれば七〇年代の闘いの戦闘性は今日国鉄の闘いのなかに、結実しているといっても過言ではないだろう。

今、第二組合、組夫など無権利の労働者のなかに、御用組合幹部と労務管理のもとで、決起しようとする条件は、合理化が強化されるなかで、ますます成熟しつつある。よって、今後の三池の運動はもっと鮮明に、経済主義的物トリ闘争を排した階級闘争を土台に、政治闘争との結合を拡大発展させることが重要である。そのため、三井資本との闘いにおいて、もっとも阻害条件となっている。第二組合の平和協定破棄をめざす、職場・地域から労働者の連帯と共闘発展をつくりだす、諸々の要求を組織し、三池労組員がその大衆運動のなかで中核的な役割をもつだけの主体性を確立することが、何よりも急務といわねばならない。

×　×

三池労組本部での交流。正面向つて右の人がソボレフ教授。左は通訳のゲオルギエフさん。暖い血の通い合つた、わずかな時間だつたが……　（城台巌さん撮影）

〝三池〟は絶対忘れない

ソ連から不意の訪れ

ソボロフ教授ら二人が　連帯の交流、溢れる悦び

去る十日、思わぬことに、三池労組は、ソビエト連邦から二人の来訪者を迎えた。もともと、労働大学と社会主義協会の招待により来日した、ソ連共産党中央委員会附属マルクス・レーニン研究所のA・I・ソボレフ教授と、通訳のゲオルギエフさん（日本の労働運動研究家）の二人で、交流の時間こそわずかなものだったにもかかわらず、「やっぱり、三池が印象に残った。三池のことは忘れない」と、別れを惜しみつつ、その夜の宿泊地の福岡に去っていった。

ソ連マルクス・レーニン研究所のA・I・ソボレフ教授らの来日は、去る四月の七―二十一日の間訪ソした、社会主義協会訪ソ団の招待にこたえたもので、とくに日本における労働者の間における教育活動と、ソ連のそれとの交流を通じ、学び合おうというのが来日の目的だった。

その日ソボレフ教授らが到着したのは、もう午後五時過ぎのことで、とるものもとりあえず、来訪を待ちかまえていた古賀組合長をはじめとする組合役員、さらに久保・会長ら三池主婦会役員と、暖い連帯をもって結ばれている同志の思いをこめて、固い握手をとり交わした。

そのあと、ニュースカーの〝はたかせ〟に乗りこみ、「ぜひ一見しておきたい」との同教授らのたっての希望により、三池闘争の主戦場となったホッパーをはじめ、今も一一・九のなまなましい怒りの思い出の焼きついている、三川鉱の坑口（ことは柵内にはいって）など案内すると、教授らは真剣な表情をもって、当時をしのぶものようであった。

組合役員との交流の場で、組合長が「三池闘争以来、ソビエトから常に暖い連帯を差し伸べられた」ことへの感謝の言葉を述べたのに対し、ソボレフ教授は語った。

「こんど、労働大学と社会主義協会の招待を受け、来日することができたが、この機に、三池をおたずねできたことが大変うれしい。今、三池といえば、ソビエトでは労働者ばかりでなく、全国民が知っている。それは、三池が常に不屈に闘っているからである。

しかも三池では、主婦の皆さんまでが、組合と一緒になって闘っている。その具体的な姿を、この席で実際に見ることができた。

私は、三池の勝利を確信している。どうかこれからも、闘っていってほしい」

ソボレフ教授らは、その日八時にはもう、その夜の宿泊地の福岡をめざし三池を去っていったが、「交流できた、三池での時間はわずかであったが、それでも三池の印象が一番だった。三池のことは絶対に忘れない」と、しみじみ言葉を残して別れを惜しんでいた。

原水禁大会へ参加

大地評、具体的活動へ

ことしも日本原水協、原水禁国民会議、核禁会議の三団体による原水爆禁止大会が、八月の被爆日を中心に開催されるが、大地評としては、大牟田原水協（榎下・事務局長）の歴史と伝統をふまえ、原水禁国民会議が主催する〝被爆二十七年原水爆禁止世界大会〟の基調と方針を支持し、大会成功のために努力を傾けることになった。

その具体的な取り組みは――

(1)原水爆禁止、被爆者救援市民募金の募集

②八月二日に到着する平和行進に参加する。

③学習会の開催

(4)広島・長崎大会に、昨年を上回る代表団を参加させる。

ほか、被爆者援護法制定、運動の統一などのためにも努力する。

連載小説

或る報復

三川岡浦益実　(3)

「猿とガネが散歩しよったら、菓子袋の落ちとったもんね」

護は背負っている強一に話し出した。

その菓子袋を最初に見つけたのはカニだったが、猿が素早く拾って木の上に持って逃げた。カニは下から、分けてくれと頼んだが、猿は頑として拒んだ。

「こずかねえ、猿は」

強一は、分け合って食べるのが当然だと思った。

「そりけん、知恵のあるガネは考えて猿に言うた」

カニは木の上に向って、小さい枝に菓子袋を提げて、枝をゆすりながら食べると、日本一おいしく食べることができる。そうしてみないかと言った。

「猿はほんなこつと思うて、一番こまか枝に袋ばひっかけて、ヨイショ、ヨイショゆさぶった」

「それから？」

強一はいよいよ興味を覚えて、護の首に巻きつけている両腕に力をこめた。

「そげんこつしたら、どげんなると思うかい」護は首をひねって背中の強一に言った。

「下につっこくだい」

「うん、ポテーンと下にこけた」

「そりばガネが拾うたつね」

「ガネは急いで拾うて穴ン中に逃げ込んだ。そこへ猿が木から降りてきて、俺にもくれと言うた」

「自分なやらんじゃったくせに」カニが応じないので、猿は口惜しがって穴の前に脱糞をはじめた。

「そんならガネは腹かいたろ。臭かもん」強一は右手を自分の小さい鼻にもっていった。

「ガネが腹かいて、しゃがんでウンコしよる猿の尻ば、ハサミ切ったけん、猿の尻は赤うなったとたい」護は、掌で強一の尻を軽くたたいた。

「そりけん、お猿さんの尻は赤かつね。痛かったろね。ばってんやっぱ猿の方が悪かばい」

幼い強一は、感心したように何度もうなずいていた。

親子の間にはいつも会話があった。強一の話題は主にその日遊んだ内容の報告だが、護は昔からの民話やコトワザなどを面白く脚色して聞かせた。

強一は、護の夜勤の時は祖母と寝るが、一番方の時は必ず護に抱かれて眠った。冬の寒い夜など、護は強一の冷たい足を股間にはさみ込んで暖め、強一が眠ってしまうまで色々な話しをしてやった。

大正七年の春、細々と営んでいた農業を捨て、護は妻と長女と母の三人を連れて炭鉱社宅に移り住んだ。二十六才の時だった。

この年の夏には米騒動が全国的に起っている。第一次大戦のあおりで物価上昇がひどく、殊に米の値上がりは話しにならぬほどひどかった。

地主、大商人の投機的買占めを政府が地主擁護のため放置し、また世論を無視したシベリア出兵を決定したことなどが原因といわれている。国民は生活苦にあえいだ。

富山県の漁民の主婦たちの米価引下げのデモによって、たちまち富山県下に波及し四十数日の間に全国ほとんどの府県に広がり、時の寺内内閣を辞職に追いこんだ。